

母親の育児観・発達初期における母子相互交渉・ 児の気質的特徴が愛着形成・行動発達に及ぼす影響

三宅和夫（北海道大学教育学部）

目 的

発達初期（生後1乃至1年半）における乳幼児の発達の先行要因と考えられるものうち主なものは児自身の生物学的特徴（気質）、母親の育児態度・育児観・母子相互交渉のあり方などであるが、それらの交互作用によって児の生後8～18カ月ごろの母親への愛着形成のあり方、さらに児の社会的・情緒的・知的発達のあり方が規定されると考えるが、こうした先行一後続の変数の関係を縦断的に把握しようとするのが目的である。

方 法

1980年7月～8月に北海道大学医学部附属病院分娩部において出生予定の児30名とその母親（初産婦）を研究の対象として選択するため、5月～6月に同病院産科外来において、妊娠32週の妊婦のうち札幌に居住し核家族で、分娩後1年は職をもつ予定のない者について協力を要請した。結果9月初旬までに分娩した者のうち30名の承諾を得た。但しこの中には親と同居する者が2例含まれることになった。また1981年2月現在（児生後6～8カ月）追跡可能なのは26例である。

(1)妊娠32週と38週において妊婦に対し、児出生に対する期待・育児の計画等について面接法と質問紙法を用いて調査した。

(2)分娩後3日目に授乳場面の観察（一部についてVTR使用）を行い、またRIS（Response to Interruption of Sucking）を測定した。これはゴムの乳首をしゃぶらせてからそれを取り去ったときに泣きなどの反応を表わすのにどれくらいの潜時があるかなどをみるためであり、児の最初期の気質の測定の一つと考えた。

(3)分娩後5日目に(2)と全く同じことを再度実施した。(2)(3)において分娩間もない時期における児への感情・態度の面接も実施した。

(4)児の生後1カ月と3カ月において、家庭訪問

を実施し、母子相互交渉における母・児それぞれの行動をコードを設けて記録した。また母親に面接して育児観・育児行動を調べるとともに児の気質についての母親の評価もあわせて得ることとした。

(5)児の生後7カ月においても、(4)と同じような家庭訪問を実施するとともに、北大教育学部附属乳幼児発達臨床センター内実験室ならびに北大医学部附属病院小児科神経外来において、母子の相互作用のVTR記録、児の知的発達の測定（VTR収録）、児の視覚的・聴覚的刺激に対する注意や慣れの測定（VTR記録とポリグラフによる心拍数・呼吸数の変化の測定）ならびに見知らぬ人への児の反応の測定（心拍数の変化）を行った。

但しこの7カ月時における観察・面接・実験は1981年4月はじめまでに完了することになっている。そこで以下においては、生後3カ月までの諸資料についての分析結果の概要について述べることにする（分析の終わった部分のみ）。

結果と考察

まず、追跡可能であった26例の母子についてみると、分娩時の母親の年齢は24歳から35歳までにわたっており、その平均は28.04歳であった。このうち正常分娩8例、その他18例のうち骨盤位1、低在横定位1、吸引分娩2、帝王切開1が含まれる。男児14名、女児12名でいずれも満期産で1分後のApgar Scoreは8点以上であり、生下時体重は2120g～3820gで平均3105gであった。

(1)生後1～3カ月の間における母親の児に対する働きかけ方の変化について、家庭訪問により行なった観察結果によってみると、全体的に積極的な働きかけが多くなる傾向がみられる。特に児の目ざめている時に抱く、眠っている時に軽くゆする、目ざめている時に愛情的な接触をする、むずかった時に話しかけるにおいてこのことに有意差

がみられる。ところでこれを男女別にしてみると
女兒においては、目ざめているときに軽くゆす
ることが、やや3カ月時の方に多いということだけ
であるが、男児においては目ざめているときに顔
を見つめる、眠っているときに軽くゆす、目ざ
めているときに愛情的な接触をする、目ざめてい
るときとむずかっているときに話しかけるにおい
て有意差がみられ、3カ月時に母親の男児に対す
る働きかけが多くなる傾向が強いといえる。この
ことから母親が男児によってより強く影響を受け
ているようであるということが推測される。

(2)児の気質的特徴と母親の児に対する感情との
関係について、1カ月・3カ月時における面接の
結果について検討してみると、1カ月時において
は全体的に有意な相関があり、扱いやすい児に対
して母親が肯定的感情を抱くという傾向がみられ
るが、3カ月時にはこのような傾向はみられない。
ところでこの関係を男女別にして検討してみると、
1カ月時においては男児において5%水準で有意
な相関が、また3カ月時においても10%水準で
はあるが男児においてのみ上述の傾向がみられた。
これらのことから、児の気質的特徴が母親の感情
に及ぼす影響は児の性によって異なること、男児
によって母親がより強く影響されることが再び推
測される。なお、児の気質については、Carey
W.B.(1971)Survey of Temperamental
Characteristicsを参考にして、授乳などいく
つかの日常生活場面での特徴を母に評価してもら
ったものを用いた。

(3)児の気質的特徴と母親の児に対する行動につ
いてみると、1カ月時においては児が扱いにくけ
れば母親が愛情的接触をより多くし(目ざめてい
るとき)、より多く抱き(むずかったとき)、より
多く話しかける(眠っているとき)という関係
がみられ、このことと上記(2)とをあわせて考え
ると男児がより扱いにくいことから、母の接触を多
くさせるのではないかと推測される。3カ月時
においては、ただ一つ眠っているときに軽くゆす
ということにおいてのみこの傾向がみられるに
すぎない。3カ月時になると母親が児の気質的特
徴により影響されることが少なくなるのは、母親
に安定した行動傾向が生じるためかもしれない。

(4)母親の児に対する感情と行動との関係につい

てみると、1カ月時には顔を見つめる(目ざめて
いるとき)、抱く(むずかったとき)、愛情的に
接触する(むずかったとき)、3カ月時には軽く
ゆす(目ざめているとき)、愛情的に接触する
(目ざめているとき)において、いずれも母親が
児に対して抱く感情が否定的である方が、肯定的
である方よりも多くの働きかけをしているという
結果が得られた。このことから多くの働きかけを
必要とするような児の母親はそれを負担と感じて
否定的な感情を抱くようになるとも推測されるが、
また母親が児に対して否定的感情を抱いているた
めに、その補償としてより多くの働きかけをする
とも推測され、そのいずれであるかはこの資料か
らだけでははっきりしない。

(5)母親の育児に対する満足度と児の能力の認知
についてみると、児が生まれて間もないころから、
目がかなりよく見え、耳がかなりよく聞え、社会
的なほほえみをするというような認知の仕方が強
い母親には育児専念の生活に満足し、自分のこと
をする時間がなくても不満でないという傾向も強
いという結果がみられた。

む す び

われわれはこれら26例について引き続き児の
12カ月になるまでを追跡し、その上ですべての
資料の分析を実施することになる。さらに次年度
において、新たに40例ほどについて、今回の予
備的研究の経験のうえに立って、より綿密な追跡
を行なう計画をもっている。

今回の分析は不十分であるが、そこから母子間
の関係が母→子という二方向で、かつ時間の流れ
にそって把えなければならないことが示唆される
ように思う。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

発達初期(生後1乃至1年半)における乳幼児の発達の先行要因と考えられるもののうち主なものは児自身の生物学的特徴(気質),母親の育児態度・育児観・母子相互交渉のあり方などであるが,それらの交互作用によって児の生後8~18ヵ月ごろの母親への愛着形成のあり方,さらに児の社会的・情緒的・知的発達のあり方が規定され则认为るが,こうした先行-後続の変数の関係を縦断的に把握しようとするのが目的である